

[学術論文]

## 外遊びの保育環境に関する研究

A study of the environment on outdoor play in day care.

野 中 壽 子

Hisako NONAKA

---

*Studies in Humanities and Cultures*

---

No. 22

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 22号  
2014年12月

**GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES**

NAGOYA CITY UNIVERSITY  
NAGOYA JAPAN  
DECEMBER 2014

[学術論文]

## 外遊びの保育環境に関する研究

**A study of the environment on outdoor play in day care.**

野 中 壽 子  
**Hisako Nonaka**

**要旨** 本研究は、空間的環境の制約が大きい都市部の保育所において、外遊びを園庭で行う場合と園外の公園等で行う場合の、実施頻度や実施時間、遊び内容、保育者の意識を比較検討することを目的とした。対象はA市公立保育所120園で、郵送による質問紙調査を行った。回収率は85%であった。園庭の広さと園外へ出かける頻度とは関連はなかったが、園外へ出かける頻度は5歳児 ( $0.25 \pm 0.17$ ) よりも0・1歳児 ( $0.46 \pm 0.21$ ) の方が高かった。4・5歳児の園庭での外遊び時間の平均は3時間以上であったのに対し、園外では行き帰りを含めて平均1時間半程度であった。園庭と園外では良く行う遊びに違いがみられ、園庭では砂場遊び、ドッジボール、園外では虫取り、花摘みなど自然に触れる遊びや固定遊具が多かった。しかし、保育者の意識としては園外に行くことで体力向上に役立つと考える割合も高かったことから、実際に行っていることとのずれが生じていることが示唆された。望ましい保育環境を考える上で、身体発達の観点からは園庭・園外を通して多様な動きがみられるよう、保育者の意識や保育のその他の条件を整備することの重要性が確認された。

**キーワード**：保育環境、外遊び、園外保育、質問紙調査

### 1 はじめに

現在保育所に入所できない待機児童は特に都市部において大きな問題となっており、その対策のため、国や各自治体において様々な方策が考えられ、2015年度には子ども・子育て支援新制度が本格的にスタートする。名古屋市の場合、待機児童が多い地域においては家庭保育室や保育所が賃貸アパート等に分園を設けるなど小規模な保育施設を増やしたり、社会福祉法人による保育所新設整備が行われる一方で、公立保育所は選択と集中をはかり、78のエリアごとにセンター保育所を設け、エリア内に公立園が複数ある場合は民間移管することになり<sup>[1]</sup>、これまでに以上に多様な保育の形態が存在するようになる。また、定員の弾力化や保育室や園庭などの最低基準の緩和が進み、保育環境の質的变化が子どもの発達に及ぼす影響が懸念されている。

近年、保育の質の評価に利用されているECERS（保育環境評価スケール）では、粗大運動（体を動かす）遊びのための空間について、体を動かす空間が交通量の多い道りを歩いて行く必要がある場合などは「不適切」であるとしている<sup>[2]</sup>。身体発達の観点からは、この粗大運動系の活動が十分に行える保育環境であるかに注目すべきであるが、前述のような多様な保育の形態が混在する中にある場合は、近隣の公園等を利用することが常態化している保育施設が増えると考えられる。

一方で、敷地内に園庭がある保育所であっても、園の外へ出かけて活動を行う、いわゆる「お散歩」は、保育活動の中でも大きな位置を占めている。都市部の保育所においては、園庭が狭いためクラスごとや年齢ごとに時間を区切って使用して、園庭が使えない時間に園外に出かける、というネガティブな理由で園外に行っているケースもみられるが、多くは、園にない環境で過ごすことの意義を積極的に評価して園外での活動を取り入れている。園外での活動を重要視すること自体は当然のことと考えられるが、子どもの発達にとって望ましい環境を考える時、園外での活動を重視し過ぎると、園庭を持つことの意義、園庭を備えることの優先順位が低くなることにつながる恐れもある。本来、園庭は日常の保育の中で、保育者が子どもの育ちを考えて環境設定を行い、保育の意図を埋め込むことが可能であると考えられている。園外での活動は、園庭で経験できないことを多く体験できることは間違いないが、園庭での活動をすべて代替できるわけではないということを改めて認識すべきであると考えられる。そのためにも、園庭と園外、それぞれの外遊びの実施状況と、それぞれの活動に対する保育者の意識を明らかにする必要がある。

## 2 目的

本研究は、望ましい保育環境を考えるうえで、空間的環境の制約が大きい都市部の保育所における外遊びの実施状況について明らかにするために、外遊びを園庭で行う場合と園外の公園等で行う場合の実施頻度や実施時間、遊び内容の違い、さらに外遊びや園外での活動に関する保育者の意識を比較検討することを目的とした。

## 3 方法

### (1) 調査方法・調査内容

2013年12月に名古屋市立保育所120園に外遊びの実施状況に関する質問紙を郵送により送付・回収した。102園より回答が得られ、回収率は85.0%であった。

### (2) 質問紙の構成

質問紙は以下の4種の設問で構成されている。

- ①フェイスシート：園の規模（クラス数、定員、在籍数、職員数）、回答者の属性
- ②園庭での外遊びの実施状況：頻度、時間（午前、午後別）、施設・設備、遊び内容

③園外での外遊びの実施状況：頻度、時間（午前、午後別）、施設・設備、遊び内容、園外施設の数

④園外での活動に関する保育者の意識：14項目、5件法

②③については時期により異なると思われるが、最も多いパターンとして回答してもらい、頻度は、週当たりどれくらい実施しているか、土曜日を入れて毎日であれば6/6のように回答するよう例示した。

(3) データ処理

統計処理にはIBM SPSS Statistics ver.21で、t検定、分散分析を行った。有意水準は5%とした。なお、本研究は名古屋市立大学大学院人間文化研究科研究倫理委員会の承認を受けた（承認番号：13011）。

## 4 結果

(1) 定員充足率

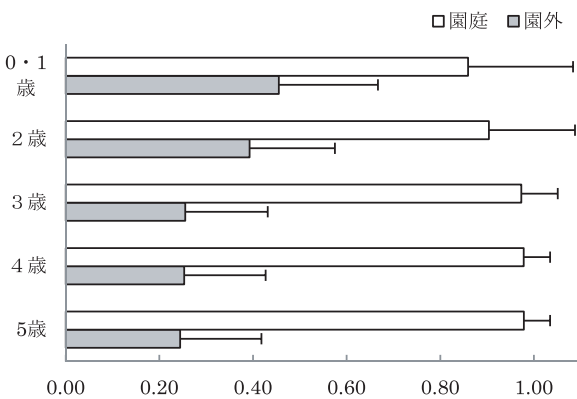
調査園の年齢クラスごとの定員と在籍数から、定員充足率の平均値と標準偏差を示した(表1)。

0・1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	平均	SD
1.10	1.03	0.95	0.85	0.86	0.92	0.12
0.26	0.13	0.14	0.14	0.15	0.15	0.08

0・1歳、2歳児クラスは定員を超過して入所する傾向がみられたが、3歳児クラス以上は、クラス規模が0・1・2歳児と比べて大きいいため、定員に余裕がある園が多かった。

(2) 外遊びの実施頻度

1週間のうちの外遊びの実施頻度を園庭と園外での活動に分けて、年齢クラス別の平均値と標準偏差を示したのが図1である。



園庭ではどの年齢もほぼ毎日外遊びを実施していた。一方、園外で実施する頻度は0・1歳児0.46、2歳児0.39であるのに対し、3歳以上では週に1.5回程度で0.24~0.26と年齢によって差がみられ、0・1歳、2歳児クラスの方がやや実施頻度は高かった。

図1 年齢クラス別にみた園庭・園外の外遊びの実施頻度

園庭の広さを300㎡未満、300～800㎡未満、800～1300㎡未満、1300㎡以上の4群に分け、分散分析を行ったところ、園庭・園外別の外遊びの実施頻度に差はみられなかった。

(3) 園庭・園外における外遊びの実施時間

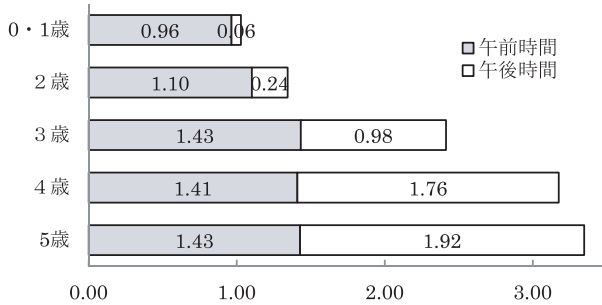


図2 年齢クラス別にみた園庭における外遊びの実施時間 (午前・午後別)

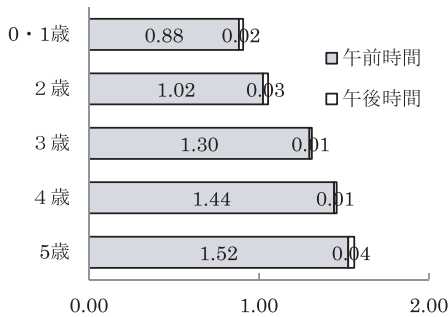


図3 年齢クラス別にみた園外における外遊びの実施時間 (午前・午後)

園庭における外遊び時間を午前と午後に分けて、年齢クラス別の平均値を示したのが図2である。0・1、2歳児は午後にはほとんど外遊びを行わないが、4・5歳児は午後の方が外遊び時間が長い傾向がみられ、園庭での外遊び時間は、3歳児以上が有意に長かった。同様に、園外での外遊び時間も午前と午後に分けて、年齢クラス別の平均値を示したのが図3である。園外での外遊びは、3歳児以上が有意に長かったが、園外へ出かけるのはどの年齢クラスでもほぼ午前中に限られていた。

(4) 園庭・園外における遊び内容

園庭、園外それぞれについて子どもたちがよく行っている遊び5つを選択回答した累計結果を図4に示した。

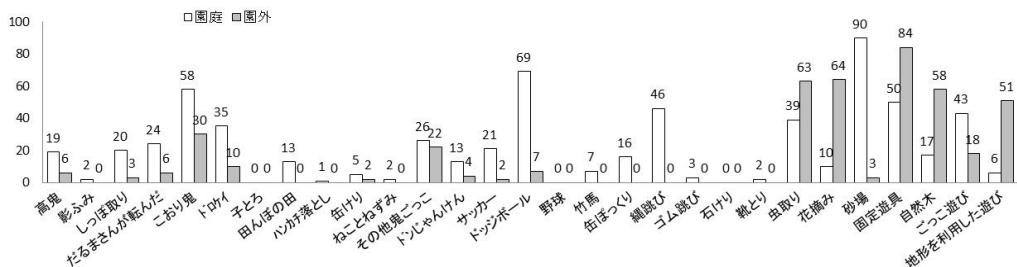


図4 園庭・園外別の遊び内容 (上位5種目選択の累計)

よく実施する遊びは、多い順に、園庭では、1. 砂場（90園）2. ドッジボール（69園）3. こおり鬼（58園）4. 固定遊具（50園）5. 縄跳び（46園）であり、園外では1. 虫取り（63園）2. 花摘み（64園）3. 固定遊具（84園）4. 自然の木を利用した遊び（58園）5. 地形を利用した遊び（51園）であった。遊びの内容は、園庭と園外で異なる傾向がみられ、園庭では各種鬼遊びからボール遊び、砂場での遊び、固定遊具での遊びと多岐にわたっていたのに対し、園外では自然に触れる遊びと固定遊具が主であった。

#### (5) 園外での活動に対する保育者の意識

「1. 子どもたちは園外に散歩に出かけるのが好きである」「2. 園外の公園等は慣れない遊具などがあり安全面で心配である」「5. 行き帰りで運動慮が確保できるので、散歩は体力向上に役に立つ」「10. 園庭がもっと自由に使えれば頻繁に使いたい」など、園外や園庭での活動に関する14項目に対する保育者の意識を、非常にあてはまる（5点）から全くあてはまらない（1点）まで5件法による得点の平均値を図5に示した。

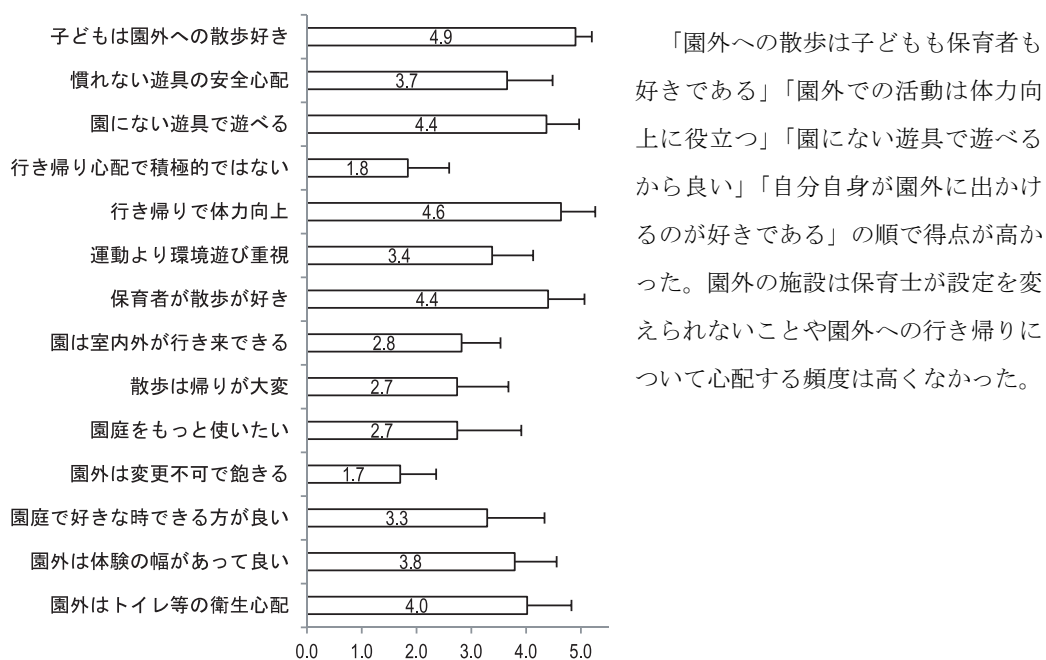


図5 園外での活動に対する保育者の意識

## 5 考察

定員充足率の平均値は、調査対象が公立園であったこともあり、3歳児以上クラスでは1.0未満、すなわち在籍数が定員より少なかったが、0・1歳児は1.1倍で定員より多くの子どもが在籍していた。これは、現在の待機児童問題を反映した結果となったが、本論文のテーマである外遊

び環境の点から考えると、動きが活発になる3歳児以上クラスの在籍者数に余裕があるのは望ましい環境であるといえる。しかし3歳以上にとって空間的環境に全く問題はないのかという点、0・1歳児、2歳児が超過入所によりクラスを2つに分ける対応をしているため、園庭使用の制約が生じていることが自由記述欄に書かれており、0・1歳児、2歳児の超過入所が3歳児以上のクラスにも影響することが示唆された。

園外の施設に出かけていく活動は、ほとんどの保育者が重要であると考えている。園の環境上やむを得ず園外に出かけている場合もあるが、保育者はそれを自覚的に捉えることはあまりない。園外での活動、いわゆる「散歩」は、自然的環境に触れられる、園ではできない経験をできる、行き帰りに長く歩くことで身体への負荷もかかり体力向上につながる、等多くの意義があると考えられている。すなわち、園外への散歩は園庭の代替であるという意識より、園内ではできない活動を行える不可欠なものとする傾向が強かった。

一方で、園外の施設は安全面で心配、近くの公園の遊具が子どもの年齢に合っていない、などの懸念を持っている保育者もいる。また、園外での活動は体力向上に役立つ、と考えている割合が高いが、実際の活動は多様な動きが含まれた運動遊びは少ない。保育者のイメージとしては園外に出かけると通常の保育に比べて時間的にも距離的にもたくさん歩くことが体力の向上につながると考える傾向にある。本研究では、よく行く公園等の施設数の設問はあるが、園に近い施設から遠い施設までの数か所を使い分けしていると考えて、そこに行くまでの所要時間に関する設問を設けていないため、どの程度歩いているのかは明らかにできなかった。しかし、園外への行き帰りについて心配する傾向は低いことから、頻繁に出かけるのは近所にある施設である可能性が高く、行き帰りの歩行による運動量の確保という保育者の期待と矛盾するかもしれない。

園外の施設での遊びは園庭にない遊具で遊んだり、花摘みや虫取り、自然の木や地形を利用した遊びが多く、鬼遊びやドッジボールなどの運動遊びはあまり行われていない。幼児期運動指針でいう「多様な動きを経験できる」活動はそれほど多くはなく、身体発達の観点からは、歩くこと以外の動きも多く含まれる遊びが園外で展開できる環境が必要である<sup>[4][5][6][7]</sup>。これには単純に「広いスペース」や「多様な遊具」があれば良いのではなく、たとえば園外に行く際、安全に遠くまで行くために、より多くの人員が配置されるよう配慮するなど、保育の空間的環境以外の条件を整備する必要があると考える。

今後の課題として、外遊びの実施頻度や実施時間を精度の高いものにするために、季節ごとに設問を分けたり、保育者の意識調査の項目を、普段の保育意識との関連がわかりやすいように変えるたりするとともに、園庭と園外における実際の外遊びの運動量や運動強度を調査し、保育者の認識とのずれの有無を検討することも必要であるとする。

※本研究は平成25年度名古屋市立大学特別奨励研究費の補助を受けた。

## 参考文献

- [1] H25年名古屋市子ども青少年局保育企画室資料
- [2] テルマ・ハームス, リチャード M. クリフォード, デヴィ・クレア著, 埋橋玲子訳: 保育環境評価スケール① 幼児版 [改訳版]. 法律文化社, 京都, 2008.
- [3] 埋橋玲子: ECERS (『保育環境スケール』) にみる保育の質. 子ども学, vol.1, 29-53, 2013.
- [4] 幼児期運動指針策定委員会: 幼児期運動指針 ガイドブック, 文科省, 2013年
- [5] 日本発育発達学会編: 幼児期運動指針 実践ガイド, 杏林書院, 2014年
- [6] 杉原隆ら: 幼児の運動能力と基礎的運動パターンとの関係. 体育の科学, 第61巻, 6号, pp455-461, 2011年
- [7] 中村和彦ら: 観察的評価法による幼児の基本的動作様式の発達. 発育発達研究, 第51巻, pp1-24, 2011年